

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック
ロイ・トミザワ／著
来住道子／訳

アメリカ対ソ連

ジェリー・シップは負けず嫌いだった。試合後に相手チームの選手と握手を交わしたりもしない。バスケットボールは彼にとって戦いであり、熱戦の最中にはラフプレーもいとわない。アメリカ男子バスケットボールのシューティング・ガードであるシップは、カッとなりやすく、その性格はオクラホマ州ティプトンの児童養護施設で育ったころから変わっていない。

シップは二メートルの長身のシューティング・ガードで、彼独特のフォームで驚くほど遠いシュートも頻繁に決め、サウスイースタン州立大学（現サウスイースタン・オクラホマ州立大学）では、史上最多の得点記録をマークした。一九五九年にアメリカプロバスケットボールチームのニューヨーク・ニックスにドラフト指名されたが、安定した仕事とNBA以上の収入が必要だったので、石油会社のフィリップスに入社することにした。フィリップスにも、今は存在しないが、NIBLという米実業団バスケットボールリーグのバスケットチームがあった。シップはアメリカ男子バスケットボール代表としてプレーする一方で、所属しているフィリップス66ersをリーグ三連覇へと導いた。

一九六二年、シップはテキサス州ラボックで行われた、アメリカ代表とソ連代表との公開試合に出場した。一九六〇年のアメリカ代表チームには、ジェリー・ウェストやオスカー・ロバートソン、ウォルト・ベラミー、ジェリー・ルーカスといった、殿堂入り確実の注目選手がそろっていた。だが、それとは対照的に、東京オリンピックに向けて選出された一九六二年の代表チームには、目立った有力選手はおらず、「二流のアメリカ代表」と称され、ソ連との公開試合も六六対六三で敗れただけでなく、ラフプレーで幕を閉じるという結果に終わった。

『ダラス・モーニングニュース』紙のスポーツコラムニストのサム・ブレアが書いているところによると、その試合の最後の瞬間、ソ連のセンターのアレクサンドル・ペトロフとシップは、ボールの取り合いを繰り広げていたが、ペトロフはシップの腕とひじであごを殴られ、硬いコートにたたきつけられた。

「残り数秒の土壇場でペトロフがディフェンスをかわしてフリーになり、高い山なりのループパスを受けてふつうのレイアップでゴールを決めようとしていたところ、激高したシップがそれをブロックしようと殴った形になったわけだが、アメリカ代表として実に恥ずかしいプレーだった。幸い、シップと比べてペトロフのほうが冷静で、自制心がきいていた」

有名なスポーツコラムニストのブラッキー・シェロッドには、第三次世界大戦を始めようとしているようだった、と書かれた、とシップは振り返っている。

一九六〇年のローマオリンピックで、アメリカはバスケットボール競技において負け知らずだった。ところが、東京オリンピック開幕直前の時点で、アメリカのマスコミには、この快進撃も終わりを告げ

ると見られた。そして、アメリカのオリンピック連覇を阻止するとしたら、それはソ連に違いないとされた。ソ連は、それまでのオリンピック三大会でアメリカに次ぐ強豪だった。

アメリカ男子バスケットボール代表チームのコーチは、バスケットボール界のレジェンドのヘンリー・「ハンク」・アイバだった。アイバはコーチを務めたチームを、一九四五年と一九四六年の全米大学体育協会（NCAA）男子バスケットボールトーナメントでは優勝に、一九六四年と一九六八年、一九七二年のオリンピックでは金メダルに導いた。しかし、そんな輝かしい実績を持つコーチでも、批判にさらされることもあった。コラムニストのジョージ・メイヤーはこう書いている。「昨日選出された、一〇月の東京オリンピック代表チーム二名は、男子バスケット史上に黒星をつける絶好のチャンスをはらんでいる」

一九六四年の代表チームには、一九六〇年のときのような圧倒的な強さがないことは、アイバにもわかっていて、「いちばんの問題は、毎試合二〇点取れるような選手が一人もないということだ」と指摘している。「だから、そこはチームワークでカバーするしかない。でも、今回のような短期間のチームの場合、プレーが雑になることがある」たしかに雑とはいえ、東京オリンピック直前の合宿でハワイに発つ前に行われた、アメリカ本土での最後の二つの公開試合で負けたことは、良くない兆候だった。

幸い、アイバは当時のコーチの中でもずば抜けて気持ちが強く、まったく動じなかった。センターのルーク・ジャクソンは、チームは絶えず練習していたよ、と話す。「アイバコーチは容赦なかった。初めてロッカールームに集まったとき、アイバコーチは選手一人ひとりにメモを渡してこう言った。『こ



ここに描いてあるプレーをよく頭に入れておくんだ。やらない者は試合に出さない』そうしてアイバコーチはロッカールームを出ていった。俺たちはそのプレーを練習したよ。やらなかった奴は、実際試合に出してもらえなかったよ」「あこのころの練習は一日五時間。きつかったね」とフォワードのジェフ・マリズは当時を振り返る。「コーチには、アイバ主義っていうのがあってね。ターンオーバーなんかしたら、ガンガン怒鳴られるよ。『何やってんだ。ぼさっとするな』ってね」

アメリカチームは、東京オリンピックの予選リーグの試合で韓国に一一六対五〇で圧勝した。ジャクソンは、その試合後にこう語っている。「アイバコーチには、立てなくなるまで練習させられたよ。リバウンドも下手くそだと言われた。どの試合も大事だってことを、ひたすら叩き込まれたよ。どんなときでも同じようにプレーできないとだめだってね。韓国に対しても決して手を抜かなかった。コー

チは本気だって、わかってたからね」

大方の予想に反して、アメリカ男子バスケットチームは、負けなしで決勝戦まで勝ち上がった。そしていよいよ、丹下健三によって設計された、素晴らしい国立代々木競技場の第二体育館で、アメリカとソ連の両チームが、ともに全勝での金メダル獲得を目指して対戦することになった。それは、地政学上での優位な立場とオリンピックの栄光をかけた戦いだった。

試合開始から八分、アメリカは緩慢なプレーが続き、ソ連に一気にリードを許す。アイバコーチは内心、焦りを感じていた。試合後の会見ではこう語った。「長い間この仕事をやってきたが、本気で勝ちたいと思うなら、いつだって追い込まれないとだめなんだ。口には出さんがね」

前半の中盤に差し掛かると、ジャクソンが巻き返しに出て、リバウンドをもぎ取り、ゴールに押し込んだ。他のメンバーもそれに続いた。ジョー・コールドウェルがポイントを重ね始めた。さらに、ビル・ブラッドリー（プリンストン大学卒業後、ニューヨーク・ニックスに入団。のちにアメリカ上院議員となる）や、ラリー・ブラウン（数々の大学やプロチームでコーチを務める）や、ウォルト・ハザードやシップも得点に絡んでいった。シップは、このトーナメントでは得点率でチームを引っ張り、第三次世界大戦と言われるようなプレーはしなかった。

終盤はアメリカがずっと圧倒し、七三対五九でソ連を下し、バスケットボールが一九三六年のベルリンオリンピックから正式競技になって以来続く連勝記録を四七に伸ばした。東京オリンピックでアメリカが獲得した金メダルは、全部で三五個となった。ソ連が一九五二年からオリンピックに参加するようになって以来、金メダル獲得数でアメリカは初めてその共産主義大国を上回ったのだ。

しかし、シップは金メダルを首にかけられたとき、冷戦のことなど気にも留めていなかった。ソ連とは何度も対戦を重ね、相手チームのことも知り尽くし、困難を乗り越えた末に勝利を収めたわけだが、シップの鼓動が早まり、胸が高ぶっていたのは、ソ連に勝ったからではなかった。子どものころの辛くて、何の拠り所もない、孤独だった日々からやっとのことで抜け出し、その苦勞からようやく解放されたのだと実感できたからだ。

表彰台に上がって金メダルの授与を待っている間、育ってきた児童養護施設や通っていた学校のことが走馬灯のようによみがえってきた。メイナードという、高校の代数の教師のことも浮かんできた。その教師には、何かを教わったというより、あなたには何を教えても無駄だと言われた。カッとなって、シップは代数のテストを白紙のまま提出して零点を取ったこともあった。すると、その教師からはこう言われた。「あなたはろくな人間にならないわ。いつか刑務所送りになるわよ」

そして二七歳になった今、頭をかかめて金メダルを首にかけてもらった瞬間、一〇代のころに味わった、マグマのように煮えたぎるものが、みぞおちのあたりにむかむかと一気にこみあげてきた。

俺はまっすぐ顔を上げて、こっちに向いてる、赤いランプがついたカメラめがけてこう叫んだ。「メイナード先生、見てるか！俺はやったぜ！」昔のことを忘れたことなんてなかった。怒りが消え去ったわけでもなかったんだ。隣にいたチームメイトのジョージ・ウィルソンには、何をわめいてるんだ？と言われた。でも、俺は何も答えなかった。

今思えば、メイナード先生は俺の人生の中でもものすごく大きな存在だったんだ。俺の怒りが傷つけてたのは、だれでもない、自分なんだって思えるようになった。実際、先生のおかげで俺は成功できた。今ならこう言えるよ。「メイナード先生、ありがとう」